

令和三年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・閉会の辞

著者	菟輪 顕量
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	27
ページ	83-84
発行年	2022-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1646/00001046/



閉会の辞

襄輪 顕量

それでは、最後に挨拶をさせていただきます。本日のシンポジウムは、鶴見大学の仏教文化研究所の先生からお声を掛けていただき、実現いたしました。私どもが現在、科研の挑戦的研究・開拓というので、「仏教学、心理学、脳科学の共同による仏教の止観とマインドフルネスの研究」という、ちょっと舌を噛みそうな長いタイトルで研究をしているのですけれども、そのことを知ってくださった先生から「共同で何かできませんか」というお話を頂いたことが切っ掛けでした。

鶴見大学の仏教文化研究所の先生方、また参加してくださいました科研のメンバーの方々、今日はどうもありがとうございます。心より厚く御礼を申し上げます。

マインドフルネスは、仏教が伝えてきたとても大切な部分ではないかと私自身も考えています。これは今日、藤田先生が最初のところで紹介をしてくださいました。「サティパッターナスutta」の冒頭の部分に出てくる言葉ですけれども、「私たちの悩み、苦しみを超え、涅槃を証得する一道である」という言い方が出てきます。私たちの悩み、苦しみを超えて、涅槃を証得するという言い方をしています。私たちが生きていく上で必ず感じる悩みや苦しみを、どのように超えて行くのか。私たちの心というのは、今日の先生方のお話で分かりましたように、外界の刺激を受けると、

必ず反応を起こします。身体の方が先にあるとでも言うのでしょうか、身体が重要な条件になっていて、その後でいろいろな心の働きが起きてくると見て取れるようなところがあるのではないかと思っています。

いずれにしても、私たちが生きていく時には、必ずついてまいります悩みや苦しみと、どのようにお付き合いしていけばよいのか、先ほどの藤田先生のお話で、それとどう向き合っていくのか、悩みや苦しみが無くなればいいのか、でも、無くならないものに、どう付き合っていくのか。このところが大事なところだと思います。それがマインドフルネスをすることによって、お付き合いすることができ、そして、その後、私たちがどう生きていくのかというところが一番問われるんだと思います。

そのところも、仏教者の方達は色々示してくださっていると思いますので、それぞれの視点で、何か気づかれるところがあったとすれば、本日のシンポジウムは成功だったのではないかと思っております。長くなりましたが、閉会の挨拶とさせていただきます。本日は、どうもありがとうございました。

(みのわ けんりょう・東京大学大学院人文社会科学系研究科教授)